

# 浄土真宗を学ぶ

## 序章 真宗の要点

—

真宗の教えは、簡単に言うと、「いつでも・どこでも・誰でも」、「選ばず・嫌わず・見捨てず」という阿弥陀仏の本願の「摂取不捨せつしゆふしや」というはたらきが、「南無阿弥陀仏」の名号となって、それを信じ念仏する人の上にはたらいで、「いつ・どこでも」のように命終わろうとも、「その人の人生を尊いものとして生きさせ、命終わるときに仏にして下さるのである、ということになるかと思えます。

このことを受け止めて考えると、人にとって、その生活の状況は、いかなるご縁に遇あっているかが決定することからであって、人生の意味を決定するものではありません。地位や財産、或いはその人の性格さえ、その人が生きてきた時代環境や社会環境・家庭環境によるものである、と言えます。つまり、人は、計はからいを超えた縁によって生き、出遇った縁により知らず知らずのうちに自らの業ごうを積み重ね、これを「宿業しゆくごう」として生きている身なのでしよう。

—

しかし、人は自分の努力で、自分が幸せと思える状況、自分に都合つごうのいいこと、自分が得をすることを手に入れるものだということが、常識となっています。逆に言えば、自分に都合の悪いことは嫌いなのです。実は、そのことで、他人との比較や

差別心、敵対心・猜疑心さいぎが起こり、また、自分が予定していることに反すること、折角手せつかくに入れたことが離れて行ってしまうことによつて、自ら苦しまなければならぬことになるのです。

通常の信仰心は、そのような心の在り方と繋がっています。習俗しゅうぞく的な祈願や、神仏を信仰することは、除災じよさい招福しょうふくと関係します。信心するといつても、道理どうりをねじ曲げ、神仏を利用してでも、自分の思い通りになりたいという身勝手さがあるように思います。

### 三

生老病死を仏教では「四苦」と言います。これに、「愛別離苦あいべつりく（愛するものとの別れ）」・「怨憎会苦おんぞうえ（好まざるものとの付き合い）」・「所求不得苦しよぐふとく（欲しいものが

手に入らないこと）」・「五蘊盛苦ごうんじょう（体ある故に苦しみを感じる）」の四つを加えて「八苦」とします。生まれてきたということが全ての苦しみの始まりであり、死ぬことが、生前に得た全てのものを失う最終の苦しみであるというのでしよう。

「一切皆苦」といつて、人生において様々のことを苦しみや悩み、悲しみとするとは、私たちが、避けることのできないことなのです。この苦しみから解放されるには、身を縁として起こる苦しみですから、身体への執着を失くし、煩惱ぼんのうを断つか、命終みょうじゆうを待つかしかないでしよ。凡夫ぼんぷというは、無明むみょう煩惱ぼんのうわれらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころをおおく、ひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず『一念多念文意』、と教えられます。そういう意味では、苦しみから解脱げだつすること、阿弥陀仏の浄土に往生することは、凡夫である私たちにとつて、命終の時以外にないのです。

常識的理解は、あらゆる執着しゅうちやくを捨て、煩惱を断つために修行することが仏教だということなのですが、多くの人たちは、この了解りようかいの前で立ち止まらざるをえないのです。私たちの日常は、待たなして展開していきます。自分自身も段々に歳を取るのです。煩惱は断つどころか、次から次へと縁に触れては条件反射的に起こってきます。煩惱とは、「煩は、みをわずらわす。悩は、こころをなやます」もので、「よろずの煩惱にしばらくられたるわれら」は、煩惱具足の凡夫以外の何者でもありません『唯信鈔文意』。

親鸞しんらんは、私たちが持つこれらの、自分の努力(自力)を当てにする生き方に対して、「本願他力」と言います。本願が元もとになって我が身が確立かくりつするのだ、ということでしょう。そうでなければ、努力が無駄になることも経験する私たちは、どこかに自分への疑いを残すことになります。

実は努力そのものも、その人が出遇った縁により獲得された能力で、それがまた、努力しなければならぬ縁によって發揮はつきされるのです。自分の努力に囚とらわれると、他人に対して嫌いやな思いを持たせたり、努力が報われないと愚痴ぐちになったりします。では、生きている間はどうかすればいいのでしょうか。

親鸞は「本願力りきにあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德くどくの寶海ほうかいみちみちて 煩惱ぼんごの濁水じよくしへだてなし」と言います。本願を信じてきた人は、煩惱の苦しみに増して、阿弥陀仏に救われる喜びの方が大きいのだと言うのでしよう。煩惱による苦しみ悩みは、自分の人生を駄目だめにすることではないのだという覚

悟と、それを引き受ける勇気を与えられることが、人が生きていく上で必要なことなのです。

「他力の本願」、或いは「他力本願」とは、必ず「阿弥陀如来の」ということを前提にした言葉であつて、状況を変えることを他人任せにするということではありません。状況がどうあれ、そこを精一杯生きることが出来る自分になるというのが、他力の効能こうのうなのです。

## 六

しかも、その本願は、どの人の上にも懸かけられてあるはたらきですから、差別したり、軽蔑けいべつしたり、排除はいじょしたりできる人を作つてはならないのです。どこまでも人を尊うやび、ささえ合い、励うまし合つて命を尽つくしていこうとすることを、出来ても出

来なくても、忘れず、出遇つた縁の中で、精一杯生き、そのことが尊うやいことだと受け止めていくことが願ねがわれているのです。

親鸞は他の祖師そしと違い、妻帯さいたいし子をもうけて家庭生活を営いとなんで、特に「いなかの人々」と共に生き、苦しみに寄り添いながら、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」が、人間の尊そんげん厳げんを取り戻す道としての、念仏の教えを伝えていったのです。

## 七

その様な本願を真実だと頂けるときは、自己の計らいを元とするが故ゆえの、自みづからの、また人間社会の、権威けんい化かという罪惡ざいあく深じんじゆう重せう性せいを見据みえながら、そのことに囚こわれ振り回されることなく、ただ、阿弥陀仏の本願のはたらき(本願力)に身

をあずけて、煩惱具足ぶつぞくのまま仏道ぶつどうを歩ませあゆせていただく喜びよろこびに生きる（正定しょうじょう聚・不退転ふたいてん。信心往生しんじんおうじょうと言いって良いだろうと思おもいます。）ことができる、如来回え向こうの信心しん（如来より賜たまりたる信心しん）に軸足じくあしがあると言いえるのです。

ここで「権威化」と言うのは、自らを正当化して、他者を自分の計らいの中なかに収おさめようとすることです。そうすると、自分の計らいと他者の計らいが一致することことでしか安心出来ないことになり、いつもどこかに不安やイライラを抱かかえて生きることとになります。それは、他人を傷つけたり、自らをも痛めることではないでしようか。

如来の本願という、自分の立場がはつきりすれば、人間が作った政治的・宗教的ていじな、或いは、職場・地域・家庭などあらゆる人間関係の世間的な、いかなる力関係りきも、自分の意味を決定しないと了解できません。そして、人種差別・能力差別・性差別せいなどの、人間の尊厳を踏みにじる行為を正当化することも、それらを助長する

権威・権力に組して、それらの為に生きることを殊ことごとく更に尊たいとすることも、権威・権力の強制や洗脳、勝手な意味づけに過かぎないと喝破かつぱできるのではないでしようか。ここにこそ、人間の真の解放があるのだと思おもいます。

## 八

もちろん、人は社会を形成して生活するのですから、権威や権力を生み出すこことを全面否定するわけではありません。どの様なピラミッドを形成しようとも、それは致し方ないことなのでしょう。問題は、その様な社会システムが、ややもすると、下層の人々に自己犠牲を強しいて、抑圧や切り捨て・排除などの差別を生み出だすという過あやまちを犯しがちであることです。

この問題を克服することは、たやすいことではありませんが、すでに述べたよう

に、仏の平等心に学ぶ姿勢をなくしてはならないのだと思います。ただ仏のみが、<sup>ひと</sup>齊しく、どの人にも、「仏弟子としての」生まれた意義と生きる喜びを与えて、その人が自らの生涯を自信を持って尽くすことができる、生きる意味を与えて下さるのです。

参考までに、真宗の<sup>しやうぎやう</sup>聖教から、いくつかの言葉を引いてみますので、興味のある方は、各々考えてみて下さい。第一章からは、親鸞著作の『顕浄土真実教行証文類（以下、「教行信証」と略称）』という、浄土真宗における根本聖典を中心に、もう少し丁寧を考えてみたいと思います。

## 【参考】

①信心<sup>ぎやくとく</sup>獲得すというは、第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるとい  
うは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり。このゆえに、南無と<sup>きみよう</sup>帰命する  
一念の<sup>しこころ</sup>処に、<sup>ほつがんえこう</sup>発願回向のこころあるべし。これすなわち弥陀如来の、凡夫に回  
向しますすこころなり。『御文第五帖第五通』

②他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏  
になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。……かつは、「諍論のとこ  
ろにはもろもろの煩惱おこる、智者<sup>おんり</sup>遠離すべき」よしの証文そうろうにこそ。…  
…学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、い

やさからん身にて往生はいかが、なんどとあやぶまんひとにも、本願には善悪淨穢なきおもむきをも、とききかせられそうらわばこそ、がくしやう学生のかいにもそうらわめ。『歎異抄第十二章』

③故聖人のおおせには、「卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずということなしとするべし」とそうらいき。われらが、このころのよきをばよしとおもい、あしきことをばあしとおもいて、願の不思議にてたすけたまうということをしらざることを、おおせのそうらいしなり。……身にそなえざらん悪業は、よもつぐられそうらわじものを。また、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひと、ただおなじことなり」と。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とこそ、聖人はおお

#### せそうらいし『歎異抄第十三章』

④自力のころをすつというは、ようよう、さまさまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽とこの下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信しんぎぎやう樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり『唯信鈔文意』。

⑤「能令瓦礫變成金」というは、「能」は、よくという。「令」は、せしむという。「瓦」は、かわらという。「礫」は、つぶてという。「變成金」は、「變成」は、かえなすという。「金」は、こがねという。かわら・つぶてをこがねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りようし・あき人、さまさまのものは、みな、いし・かわ

ら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りようし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなんどを、よくごがねとなさしめんがごとしとたとえたまえるなり。『唯信鈔文意』

⑥当流の他力信心のおもむきともうすは、あながちにわが身のつみのふかきにもころをかけず、ただ阿弥陀如来を一心一向にたのみたてまつりて、……みなたすけたまえる不思議の誓願力ぞとふかく信じて、さらに一念も本願をうたがうころなければ、かたじけなくもその心を如来のよくしろしめして、すでに行者のわるきごころを、如来のよき御ごころとおなじものになしたまうなり。このいわれをもつて仏心と凡心と一体なるといえるはこのごころなり。これによりて、弥陀如来の遍照へんじょうの光明のなかにおさめとられまいらせて、一期いちごのあいだはこの光明

のうちにする身なりとおもうべし。さていのちもつきぬれば、すみやかに真実の報土ほうどへおくりたまうなり。『御文第二帖第十通』

⑦常没じょうもつの凡愚ぼんぐ・流転るてんの群生ぐんじょう、無上妙果むじょうみょうかの成じがたきにあらず、真実しんの信樂しんがく実じつに獲ること難し。何をもつてのゆえに。いまし如来の加威力かいはりきに由るがゆえなり。博く大悲広慧ひろくの力に因るがゆえなり。『教行信証・信巻』

⑧法然聖人のおおせには、「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」とおおせそうらいし『歎異抄後序』



⑨諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うることなし。…(承元の法難の記述)…しかればすでに僧にあらず俗にあらず。このゆえに「禿」の字をもつて姓とす。『教行信証・後序』

真仮を知らざるに由つて、如来広大の恩徳を迷失す。『教行信証・真仏土巻』

聖道・浄土の真仮を顕開して、邪偽・異執の外 教を 教 誠す。『教行信証・方便化身土(本)巻』

それ、もろもろの修多羅に拠つて真偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誠せば、『涅槃経』(如来性品)に言わく、仏に帰依せば、終にまたその余の諸天神に帰依せざれ、と。『教行信証・方便化身土(末)巻』